

<今回>268回目 2019年10月25日(金)15時~18時 601号室
読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p99 それは後魏の石碑銘

<前回>267回目(19-10-7) 出席者 8名
資料(19-10-07-1)前回のまとめ(清水)
-2) 日程表(清水)
-3) 天孫降臨と霧島地図(高山)

A 報告 来年3月の日程表で3月13日は2つとった。どちらにするか意見を求めたが午後1時からでは早いのでそちらは解約する。

まとめの中の訂正、①高山氏、五時は祭祀用に設定した田畑ではなくで広場、②大墨氏(C)以下の修正意見

B 資料 -2) 日程表来年3月13日分は16時からにする。

-3) 高山氏から山田宗睦氏の「聖地の謎を探る」から天孫降臨の話を読み、現地に行こうとしたが台風で果たせなかったのが、概略報告があり、意見が飛びかって時間を取ってしまった。霧島神宮付近の地図から霧島神宮古宮の右に御鉢という旧噴火孔があり、その部分が明治維新のドサクサで宮崎県側から鹿児島県側に取り込まれたことが良くわかる地図であった。北方に韓国岳もあり、右上には夷守(小林市)の地名がある。噴火を恐れて霧島神宮は現在地に移った。火常峰の名、天の逆矛は坂本龍馬が抜いたことになっている。天孫降臨神話の前段は垂直型、皇孫遊行からは水平型神話で降臨地は背振山脈、高祖山あたりの博多湾岸であろう。韓国岳の名は後づけで半島人の入植、隼人や秦氏の名が挙がっている。私は「衣」の評の姫や助督の反乱で大伴旅人の征服に会い最後の九州王朝人の名残と思っている。

懇親会7名 津多屋15741円(2000・7) -1741円

C 読書 p96 いわゆる景初3年鏡 より

1) 景初3年鏡、正始元年鏡 昭和26年和泉黄金塚より出土した6面の鏡の内、1つに景□3年の紀年鏡があった。小林行雄の語るエピソードは昭和26年東京国立博物館で開かれた考古学協会の大会で末永雅雄氏が発表した景和3年という紀年鏡が発掘されたという発表だった。景和は元年(465年)しかない。小林は回覧された写真をみて3世紀の鏡に似ている。古代では初と和の文字は似ていると思っていた。

2) 石上神宮の7支刀の解説で福山敏男氏は泰和か泰初かが問題になって結局泰(太)和4年と結論付けられていた。これから小林は景和から景初の読み替えもあり得ると考えていた。小林は末永に福山の意見を聞くようにアドバイスした。

3) 昭和29年出版された和泉黄金塚古墳と題する報告書には「景初3年」製作の鏡と発表されて古代史家を感嘆させた。古田はこの報告書を読むうちに景は確かだが、次の文字は偏旁から熟視観察すれば初と読むべきことが解る(古田の意見か小林の意見か不明)。

4) 羅振玉の「増訂碑別」の「初」の部の文字、「碑別字拾遺」の各種の墓誌から採録した文字を比較すれば初と断定できる(小林和泉黄金塚古墳第7章主要遺物の観察)といった。

次回日程 19-11-11(月)16時から18時 601会議室

-11-25(金) 15時から18時 1503号室

-12-9(月) 15時から18時 602会議室